

『十訓抄』じゆんしやう「大江山」

1、はじめに

- ・ 作者…未詳（六波羅二膺左衛門入道ともいわれている）
- ・ 成立…鎌倉時代（1252年）〔鎌倉時代は1185～1333年〕
- ・ ジャンル…説話集（民間に伝わる話や物語のこと）
- ・ 別タイトル「大江山の歌」など
- ・ 要約

和泉式部が夫の保昌と丹後につっていたときに、前夫との娘である小式部内侍が、京での歌合せに選ばれた。

1

京では、定頼中納言が、小式部内侍のいる局むねを通るときに、ちよっかいをかけたが、小式部内侍が即興で詠んだ歌に驚き、返答もせず逃げ去った。

これより小式部内侍は歌詠みの世界で評判になった。

2. 1、本文

和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、小式部内侍、歌詠みにとられて詠みけるを、定頼中納言たはぶれて、小式部内侍ありけるに、「丹後入遣はしける人は参りたりや。いかに心もななく思すらむ。」と言ひて、扇の前を過ぎりしけるを、御簾よりならばかり出でて、わづかに直衣の袖をひか入て、

大江山いくの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

と詠みかけけり。思はずに、あなまこへて、「いほいか。」かかるといせはあはれはかひ言ひて、返歌にも及ばず、袖を引き放ちて、逃げられけり。小式部、これより歌詠みの世におぼえ出でて来にけり。

これはうちまかせての理運のことなれども、かの卿の心には、これほどの歌、

ただいま詠み出だすべしとは知られざりけるにぞ。

2. 2、本文

和泉式部^{※1}、保昌^{※2}が妻にて丹後^{※3}に下りけるほどに、京に歌合^{※4}ありけるに、
小式部内侍^{※5}、歌詠みにとられて詠みけるを、定頼中納言^{※6}たはぶれて、小式部内侍あり
けるに、「丹後へ遣はしける人は参り^{☆1}たりや^{☆2}。いかに^{☆3}心もとなく^{☆4}思す^{☆5}りむ。
と^{☆6}言ひて、局^{※7}の前を過ぎられけるを、御簾^{※8}よりなからばかり出てて、わづかに直衣^{※9}
の袖をひかへて、

大江山^{※10}のいへの^{※11}の道の遠ければ^{☆7}まだふみ^{☆8}も見ず^{☆9}天の橋立^{※12}
と詠みかけけり。思はずに、おめをこへて、「いはうか」。かかぬゆいせぢ^{☆10}。
とばかり言ひて、返歌にも及ばず、袖を引き放ちて、逃げられけり。小式部、これより歌詠
みの世におぼえ^{☆11}出で来てけり。

これほうちまかせての理^{※13}となわども、かの卿^{※14}の心には、これほべの歌、
ただいま詠み出だすべしとは知られぬりけるにぢ^{☆12}。

3、補足・注／重要単語・文法

【補足・注】

- ※1…平安時代の歌人で保昌の妻。『和泉式部日記』を書く。なお前夫はたちばなのみちたか橋道貞。
- ※2…藤原保昌。このころ丹後守でたんののみあつた。
- ※3…丹後の国。今の京都府の北部。
- ※4…歌人が左右に分かれ、歌を詠み優劣を競う催し。
- ※5…和泉式部と前夫である道貞のとの娘。
- ※6…藤原定頼。歌人。きんとうり公任の子。
- ※7…女官の私室。
- ※8…御殿のすだれ簾。外から見えないようにする。
- ※9…男性貴族の平常服。
- ※10…今の京都府西北部にある山。
- ※11…今の京都府福知山市生野。
- ※12…今の京都府宮津市にある日本三大名所。
- ※13…当然のこと。

【重要単語・文法】

- ☆1 「参り」…「来」の謙讓語「参る」の連用形
 - ☆2 「や」…疑問の係助詞
 - ☆3 「つか」…「どの」のようじ。↓↓係る語（いじ）は「らむ」は連体形になる
 - ☆4 「心もとなく」…待ち遠じ。じれった。
 - ☆5 「思す」…「思ふ」の尊敬語
 - ☆6 「さへ」…「さへ」の「さへ」は「生」と「行へ」の掛詞
 - ☆7 「遠ければ」…已然形「遠けれ」＋「ば」↓順接確定条件
 - ☆8 「ふみ」…「ふみ」は「踏み」と「文」の掛詞
 - ☆9 「あたまこへ」…驚くほど。あまれる。
 - ☆10 「やは」…反語の係助詞。「やは」の形のとまは反語になることが多い。
 - ☆11 「おぼえ」…評判。
 - ☆12 「こや」…断定「なり」の連用形＋疑問の係助詞。「こや」など訳す。
- ←「こや」の後「こや」が省略されている。

4、現代語訳

和泉式部が、保昌の妻として丹後に下っていたら、京で歌合せがあったのだが、そのとき、(和泉式部の娘の)小式部内侍が歌詠みに選ばれて詠んだところ、定頼中納言がふざけて、(局に)小式部内侍がいたとき、「お母様に歌を詠んでもらうために(丹後へ遣わした人は参上しましたか)＝帰ってきましたか)。(あなたはその手紙を)どれほど待ち遠しくお思いでしょう。」と言って、局の前を通り過ぎなされたのを、(小式部内侍は)御簾から半ば身を乗り出して、すこし(定頼中納言の)直衣の袖を引きとどめて、

大江山を超えて生野を通っていく道は遠いので、まだ天の橋立へ踏み入ってみたこともありませんし、母からの文も見せていません。

と詠みかけた。(定頼中納言は)意外なことで驚いて、「これはどうしてでしょうか。このようにあるのでしょうか、いやならどうでしょう。」とだけ言って、返歌もできずに、袖を引っ張って逃げなされた。小式部内侍はこのときより歌詠みの世界に評判が広まった。このことは(小式部内侍にとっては)ありふれた当然なことなのですが、この定頼卿の心には、(小式部内侍が)これほどの歌を、即座に詠むことができるとはお分かりにならなかったのでしょうか。

5. 1、本文と現代語

和泉式部が、保昌の妻として丹後に下っていたところに、京で歌合せがあった（のだが、その）とき、（和泉式部の娘の）小式部内侍が歌

和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、小式部内侍、歌

詠みに選ばれて詠んだところ、定頼中納言がふざけて、（局に）小式部内侍がいたときに、「お母様に歌を詠んでもらうために（丹後へ遣わ

詠みにとられて詠みけるを、定頼中納言たはぶれて、小式部内侍ありけるに、丹後入遣は

した人は参上しましたか（＝帰って来ましたか）。（あなたはその手紙を）どれほど待ち遠しくお思いでしょう。」と云って、局の前を通り過ぎなされたのを、

しける人は参りたりや。いかに心もとなく思すらむ。」「言ひて、局の前を過ぎりしけるを、

（小式部内侍は（御簾から半ば身を乗り出して、すこし）定頼中納言の（直衣の袖を引きとどめて、

御簾よりなからばかり出でて、わじかに直衣の袖をひか入て、

大江山を超えて生野を通っていく道は遠いので、まだ天の橋立へ踏み入って見たこともありませんし、母からの文も見えていません。

大江山いくの道の遠ければまだふみも見せず天の橋立

と詠みかけた。（定頼中納言は（意外なことで驚いて、「これはどういふことでしょうか。このようないことがあるのでしょうか、いやないでしゅう。」とだけ

と詠みかけけり。思はず、にあまつかへて、「いほつか。」「かかぬみせむあむとほかひ

言って、返歌もできずに、袖を引っ張って逃げなされた。小式部内侍はこのときより歌詠みの世界に

言ひて、返歌にも及ばず、袖を引き放ちて、逃げられけり。小式部、これより歌詠みの世に

評判が広まった。

お母え出で来てけり。

このことは（小式部内侍にとっては）ありふれた当然なことなのですが、この定頼卿の心には、（小式部内侍が（これほどの歌を、

いわれはつちまかせての理遣いとなれども、かの卿の心には、いわほどの歌、

「即座に詠むことができるとはお分かりにならなかったのでしょうか。」

ただいま詠み出だすべしとは知らわぬひまひだせ。

5. 2、本文と現代語訳

和泉式部が、保昌の妻として丹後に下っていたところに、京で歌合せがあった（のだが、その）とき、

和泉式部※1、**保昌**※2が妻にて**丹後**※3に下りけるほどに、**京に歌合**※4ありけるに、

（和泉式部の娘の）小式部内侍が歌詠みに選ばれて詠んだところ、定頼中納言がふざけて、（局に）小式部内侍がい

小式部内侍※5、**歌詠みにとられて詠みけるを、定頼中納言**※6たはぶれて、**小式部内侍あり**

たときに、「お母様に歌を詠んでもらうために）丹後へ遣わした人は参上しましたか（＝帰ってきましたか）。（あなたはその手紙を）どれほど待ち遠しくお思いでしょう。」

けるに、「**丹後へ遣はしける人は参り**※1**たりや**※2。**いかに**※3**心もとなく**※4**思す**※5**りむ**。」

と言つて、局の前を通り過ぎなされたのを、（小式部内侍は）御簾から半ば身を乗り出して、すこし（定頼中納言の）直衣

と言ひて、**局**※7の前を過ぎらるるを、**御簾**※8よりなからばかり出でて、**わづかに直衣**※9の袖を引きとめて、

※9の袖をひかへて、

大江山を超えて生野を通つていく道は遠いので、まだ天の橋立へ踏み入つてみたこともありませんし、母からの文も見せていません。

大江山※10**うへの**※11**の道の遠ければ**※12**まだふみ**※13**も見ず**※14**天の橋立**※15

と詠みかけた。（定頼中納言は）意外な（こと）で驚いて、「これはどうしてでしょうか。このようないことがあるのでしょうか、いやなに（こと）でしょう。」

と詠みかけけり。思はず、**あままこへ**※16。「**いはつか**」かかるといふやま、**あま**※17。

とだけ言つて、返歌もできずに、袖を引っ張つて逃げなされた。小式部内侍はこのときより歌詠

とばかり言ひて、返歌にも及ばず、袖を引き放ちて、逃げられけり。小式部、これより歌詠

みの世界に評判が広まった。

みの世におもえ、**出で来にけり**。

このことは（小式部内侍にとつては）ありふれた当然なことなのですが、この定頼卿の心には、（小式部内侍が）これほどの歌を、

これはつちまかせこの理運※13のことなれども、かの卿※14の心には、これほどの歌、
即座に詠むことができるとはお分かりにならなかったのでしょうか。

ただいま詠み出だすべしとは知られぬひびるにぞ★12。

6、品詞分解

単語	品詞等
和泉式部、	名詞
保昌	名詞
が	格助詞
妻	名詞
にて、	格助詞
丹後	名詞
に	格助詞
下り	動詞・四段・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
ほど	名詞
に、	格助詞
京	名詞
に	格助詞
歌合	名詞
あり	動詞・ラ変・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
に、	格助詞
小式部内侍	名詞
歌詠み	名詞

に	格助詞
とら	動詞・四段・未然形
れ	助動詞・受身・連用形
て	接続助詞
詠み	動詞・四段・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
を、	格助詞
定頼中納言、	名詞
たはぶれ	動詞・下二段・連用形
て、	接続助詞
小式部内侍	名詞
あり	動詞・ラ変・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
に、	格助詞
丹後	名詞
へ	格助詞
遣はし	動詞・四段・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
人	名詞
は	格助詞

参り	動詞・四段・連用形
たり	助動詞・完了・終止形
や。	係助詞・疑問
いかに	副詞
心もとなく	形容詞・ク・連用形
思す	動詞・四段・終止形
らむ。	助動詞・現在推量・連体形
と	格助詞
言ひ	動詞・四段・連用形
て、	接続助詞
局	名詞
の	格助詞
前	名詞
を、	格助詞
過ぎ	動詞・上二段・未然形
られ	助動詞・尊敬・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
を	格助詞
御簾	名詞
より	格助詞

なから	名詞
ばかり	副助詞
出で	動詞・下二段・連用形
て、	接続助詞
わづかに	形容動詞・ナリ・連用形
直衣	名詞
の	格助詞
袖	名詞
を	格助詞
ひかへ	動詞・下二段・連用形
て、	接続助詞
大江山	名詞
いくの	掛詞
の	格助詞
道	名詞
の	格助詞
遠けれ	形容詞・ク・已然形
ば	接続助詞
まだ	副詞
ふみ	掛詞

も	係助詞
見	動詞・上一段・未然形
ず	助動詞・打消・終止形
天の橋立	名詞
と	格助詞
詠みかけ	動詞・下二段・連用形
けり。	助動詞・過去・終止形
思はずに	形容動詞・ナリ・連用形
あさましく	形容詞・シク・連用形
て、	接続助詞
「こ	代名詞
は	係助詞
いかに。	副詞
かかる	連体詞
よう	名詞
やは	係助詞・反語（係）
ある。」	動詞・ラ変・連体形（結）
と	格助詞
ばかり	副助詞
言ひ	動詞・四段・連用形

て、	接続助詞
返歌	名詞
に	格助詞
も	係助詞
及ば	動詞・四段・未然形
ず、	助動詞・打消・連用形
袖	名詞
を	格助詞
引き放ち	動詞・四段・連用形
て	接続助詞
逃げ	動詞・下二段・未然形
られ	助動詞・尊敬・連用形
けり。	助動詞・過去・終止形
小式部、	名詞
これ	代名詞
より、	格助詞
歌詠み	名詞
の	格助詞
世	名詞
に	格助詞

7、和歌の修辞法

おぼえ	名詞
出で来	動詞・カ変・連用形
に	助動詞・完了・連用形
けり。	助動詞・過去・終止形
これ	代名詞
は	係助詞
うちまかせ て	副詞
の	格助詞
理運	名詞
の	格助詞
こと	名詞
なれ	助動詞・断定・已然形
ども、	接続助詞
か	代名詞
の	格助詞
卿	名詞
の	格助詞
心	名詞
に	格助詞
は、	係助詞

これ	代名詞
ほど	副助詞
の	格助詞
歌、	名詞
ただいま	副詞
詠み出だす	動詞・四段・終止形
べし	助動詞・可能・終止形
と	格助詞
は、	係助詞
知ら	動詞・四段・未然形
れ	助動詞・尊敬・未然形
ざり	助動詞・打消・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
に	助動詞・断定・連用形
や。	係助詞

大江山 いくのの道の 遠ければ

まだふみも見ず／
あま はしだて
天の橋立

【解釈】

大江山を超えて生野を通っていく道は遠いので、まだ天の橋立へ踏み入ってみたこともありませんし、母からの文も見えていません。

【修辞法】

○掛詞

【5v6】…地名の「生野」と「行く」

【ふみ】…「文」と「踏み」

○四句切れ

○倒置法…四句目と五句目が倒置

○体言止め…「天の橋立」

○縁語…「踏み」は「橋」の縁語

8、参考

- ・教科書『新編古典B』（2015）東京書籍
- ・教科書『古典B古文編』（2017）数研出版
- ・『明治書院版教科書ガイド新精選古典B古文編』（2019）真珠書院
- ・『原色小倉百人一首』（2016）文栄堂